



日本永代蔵 — 現代語訳付き —

井原西鶴著 堀切実訳注 新版
株式会社 KADOKAWA 2009 (角川ソフィア文庫)

経営学部教授 大柳 康司

数年前、山形県酒田市を訪れたことがあった。酒田といえば、戦後の農地改革が実施されるまで日本最大の地主であった本間家の地である。「本間様には及びもせぬが、せめてなりたやお殿様」という歌があるほどの豪商であった。歴代の本間家当主の中でも「酒田五法」を開発したといわれている江戸時代中期の本間宗久が有名である。「酒田五法」とは、現在の株式市場でよく利用されている「ローソク足」などのテクニカル分析手法の一つである。このようなエピソードを知ると、現代にも通じている日本型ビジネス手法の創成期は、江戸時代なのではないかと思ってしまう。

また酒田には^{あぶみや}錠屋という豪商もいた。この錠屋は、今回紹介する『日本永代蔵』の第二巻の「舟人馬かた錠屋の庭」で紹介されている。「錠屋には錠屋のやり方がある。」と書かれているように、商品を欠品しないように仕入、それを売却し、1年でどれだけ利益を出したかを把握するために、12月11日に毎年決算を行って

いたようだ。現在、多くの企業で同じことが行われていることであるものの、江戸時代にこのようなことがなされていたことは驚きに値する。現在の経営手法にも通じる「商売の基本」は、昔から連綿と続いているのである。

今回紹介する『日本永代蔵』は、井原西鶴によって江戸時代にかかれた日本初のビジネス書といえるものである。日本史の受験で名前だけしか知らない学生が多いと思うが、この本は一読に値する。原文をそのまま読むのは、困難かもしれないが、現代語訳であれば、気軽に読めるのではないか。巻一から巻六まであり、各巻5つのテーマ、計30テーマが書かれている。1つのテーマは、現代語訳で4、5ページであるため、少しの時間で読み終えることができる。学生時代に、ビジネスの基本とはどのようなものであるのか、江戸時代という遠い昔の話ではあるが、触れてみるのがよいのではないか。